第5号（最終号）　地域連携プロジェクト（岡垣町・九州共立大学）

地域活性化

岡垣歴史新聞

制作・編集・発行

岡垣町・九州共立大学　地域連携
『岡垣歴史新聞』
プロジェクト編集委員会
（九州共立大学内）
代表　山田　明
〒807-8585
北九州市八幡西区自由ケ丘1－8
093－693－3403（山田明研究室）

巻頭言　最終号に寄せて

九州共立大学　山田　明

岡垣歴史新聞は、九州共立大学と岡垣町の地域連携事業プランとして学生ボランティアにより２０１６年に創刊されたもので、今回、最終号（第５号）をお届けすることになりました。地域の魅力再発見！をテーマに、岡垣町の地域活性化に貢献することを目的としたものです。

この５年の歩みを、少し振り返ってみたいと思います。この歴史新聞の特徴は、毎回特集ページを組むことでした。創刊号では「戦国の城」（手野城、三吉城、岡城址）、第２号では「湯川山の石垣跡の謎」（砂防施設説、牧場説、古代山城説等）、第３号では「昔、岡垣町に炭鉱があった」、第４号では「戦国時代の岡垣、見参！」（岡垣と麻生氏の関係を紐解く）です。それぞれのテーマは、岡垣町が誇れる歴史遺産です。本学の中国やベトナムなどからの留学生の中には、日本語や日本文化に興味をもっている学生が多くいます。歴史新聞では、留学生に取材、記事、編集に参加し学ぶ機会を提供しました。この留学生記者の活躍も大きな特徴でした。海蔵寺（木造馬頭観音坐像）、高倉びわにちなんだ「日中びわ考」、中国の馬と湯川山の馬の対比、南京の城跡、です。これらは岡垣の歴史とそれぞれの出身国の歴史をクロスオーバーして記事を書いてもらいました。私自身、高倉びわのルーツが中国にあることを初めて知りました。岡垣町民の皆様も私と同じ経験をされた方も多かったのではないでしょうか。まさに歴史の再発見です。

これまで発行した新聞の読者の方より、激励のお手紙をいただくこともありました。創刊号で岡垣の偉人伝として、名医といわれた加藤健次医師のことを掲載しました。山田小学校や岡垣中学校の校医もされ、岡垣中三十年史には「（岡垣）学校保健の父」という言葉も残されている人物です。この記事について、戦後に戦地から引き揚げてくる人々を海老津駅で治療に当たられていた光景を思い出したという内容でした。とても懐かしかったということでした。第３号で炭鉱を特集した号では、元炭鉱に勤務されていたからお手書きをいただきました。現在では昔日の炭鉱をしのぶ跡は、数件の炭住跡、採掘の跡、炭鉱関係者の墓石などが残されているのみなので、この歴史を残してほしいと書かれていました。歴史新聞の目的は、地域の再発見を通して町民の岡垣に対する興味・関心を高め、町外の人にも広報することで地域活性化に寄与することです。その意味で、いただいた投書から新聞発行の意義が認められたような気がしました。

最終号は、近代における岡垣町の教育について特集します。「教育は国の基（もと）い」と言います。明治、大正、昭和に至る岡垣における学校教育の概要を知っていただければ幸いです。ここに「歴史と自然の町、岡垣！」の魅力再発見！の岡垣歴史新聞の最終号をお届けします。５年間のご愛読に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

※最終号における史料・写真については、『岡垣町史』（昭和63年）を活用させていただきました。

岡垣歴史新聞の第5号発刊に寄せて

岡垣町長　宮内實生

岡垣歴史新聞は、当町と九州共立大学が平成27年に包括的地域連携協定を締結した翌年に創刊され、今回、最終号となりました。この岡垣歴史新聞は、町の魅力の再発見をテーマに編集され、これまで、毎号特集が組まれ、多くの町民の皆さんに町の魅力ある歴史を伝えていただいたものと考えています。

さて、町では、現在、令和３年度からスタートする町の最上位計画である第６次総合計画の策定に取り組んでおり、その中で町民アンケートやインターネットを活用した県内の他の市町村にお住いの方へのアンケート調査を実施しました。この中では、自らの住む市町村への愛着度を測る項目を調査した結果、岡垣町民の町への愛着度は、県内の他の市町村と比較して上位に位置し、岡垣町民の町への愛着度が非常に高いという結果が示されました。

この町への愛着度を問う設問は、今回、初めて調査したものですが、町への愛着度が非常に高いという結果は、町の魅力を再発見することを目的に発行されているこの岡垣歴史新聞も貢献されているのではないかと思っております。改めましてこの５年間の取組に対し、感謝を申し上げ最終号の発刊にあたってのご挨拶とさせていただきます。

福岡藩士　海妻甘蔵（かいづまかんぞう）

1．はじめに

岡垣歴史新聞、年一回の発刊で、今年で五年目を迎える。と同時に今年で終了となる。そこで最後は、岡垣の教育史にスポットを当てたい。そして、ある人物に行き当たった。その名を海妻甘蔵という。甘蔵は、幕末の福岡藩士で、国学者である。そう、サムライ国学者なのである。剣は、阿部立剣道（流派名）を修め、その生涯を通して国学を探求した学者である。その甘蔵が人生のある時期、長きに渡って遠賀郡吉木村に居住した。吉木在住に際して甘蔵は、地元子弟の教育はもちろんのこと、高倉神社の祭祀、保存に大きく尽力した。甘蔵が吉木というか、岡垣の地に残した足跡は大きい。では、この、甘蔵が吉木の地に残した足跡と甘蔵自身の人生をかぎられた紙幅ではあるが、この稿に記してみたい。

2．福岡藩士・海妻甘蔵

文政７年、福岡藩の儒学者・井上周盤の次男として生まれた。長じて藩士海妻家の婿養子となり、海妻家の家督を相続した。最初、その名を静馬とし、後に久左衛門、さらに甘蔵と改めた。本稿では明快さを重視し、甘蔵という名で統一して記すこととする。甘蔵は、学問を父の周盤から手ほどきを受け、剣術は藩の剣術指南役・吉留幸太夫に学んだ。この吉留門下の兄弟弟子に加藤司書や月形洗蔵・海津幸一がいる。加藤・月形・海津の三人は、幕末の福岡藩で勤王派の代表的人物で甘蔵も大きく影響を受けることになる。やがて、１８４８年、25歳になった甘蔵は、江戸での学問修業に臨み、国学を修める。そして江戸から帰藩すると右筆に任命された。そして同時に福岡城下の呉服町に塾を開いて子弟教育に当たった。一方藩内での役職にも参政書記編史係、執政書記を経て刑官に任命されている。この間、特筆されることとしては、刑官と成るや囚人たちを使って堤防の修復や塩田開発をおこなったことが上げられている。

3．勤王家・海妻甘蔵

前に記した甘蔵の兄弟弟子・月形と海津は筑前勤王党を結成し、藩の政治にも関与するようになっていった。月形は、土佐勤王党の武市半兵太らと連動し、福岡藩を尊王論で改変しようとしていた。時の藩主・黒田長溥の参勤交代を阻止するなど反幕府的動きを活発化していた。この動きに甘蔵も加担していた。そのため一時謹慎処分を受けるが赦されて府学訓導に任命される。しかし同僚との意見対立から辞職する。辞職後は宗像郡池田村に隠した。その後、藩内では保守派の勢力が巻き返しを図り甘蔵の兄弟弟子だった加藤司書は切腹、月形洗蔵と海津幸一は斬罪となった。これは藩命によるもので、同門の士では甘蔵だけが無事だった。

『田島沿革史』＜早良郡田島村、現、福岡市城南区田島 巻之1＞
海妻甘蔵（明治30年）

4．吉木移住

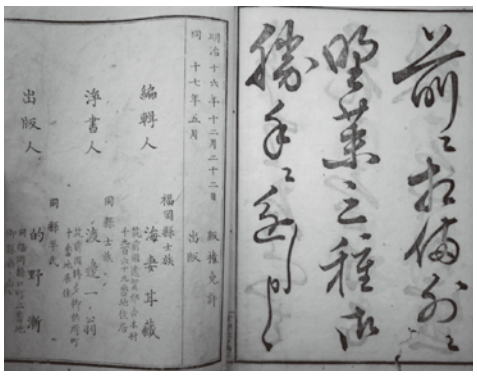
甘蔵が宗像郡に隠家している間に世の中は大きく変わり、江戸幕府は政権を天皇に返上した。福岡藩でも藩論が変わり、藩主も黒田長知に代わった。甘蔵も藩当局から呼び戻された、鉄砲頭兼役所取締役に任命された。さらに明治元年には文武館和学総裁も兼務することになる。すなわち、藩の学校の国学担当の総責任者となった。だが明治二年になると、職を全て辞した上で、家族を伴い遠賀郡吉木村（現・岡垣町吉木）へ移住した。そして村の寺院跡地に住居を構え、合わせて私塾・己百斎を開いた。己百斎とは、当時甘蔵が称していた号に起因する。

5．吉木での活動と功績

移住後の明治６年（１８７３）には地元高倉神社の祠官となる。正式には遠賀郡郷社祠官兼神教導職権大講議という、とても長い役職名である。では甘蔵の活動や功績について記してみたい。まず高倉神社の社殿や境内の毘沙門天像の修復や保存に蔭ながら尽力している。また高倉神社の大祭でも、露店の所場代（出店料）を無料とし、露店を多く集め、祭の盛況化を図っている。さらには高倉小学校の仮校舎として高倉神社の社務所を提供している。一方、学問の分野では高倉神社の毘沙門天像の奉納者・須藤駿河守の研究書や自身の聞き書き等を「己百斎筆話」に著している。

6．甘蔵の対立者

吉木に移った甘蔵は、一見順風満帆のように見受けられるが、実の所、地元有力者との対立があった。その地元有力者というのは三輪佐一郎という人物である。佐一郎は明治維新後、吉木村の副戸長を務めた人物であり、地域を物心両面で支えた人物である。佐一郎の三輪家というのは、祖先をたどると三輪善房という人物につながる。善房は、江戸時代初期、吉木村の代官を務めた人物である。江戸時代初期、初代福岡藩主・黒田長政の重臣で、黒崎城の城主を任命された井上之房（井上周防）は、三輪善房の叔父である。善房の母が之房の姉だったのである。そういったこともあって、井上之房がその晩年、吉木に隠居屋敷を構え、その幕所を龍昌寺に定めたのである。ただ井上家は之房の孫の代で没落、この時三輪家は武士を辞めて吉木村に土着、帰農して村の庄屋となり、代を重ねながら繁栄し、酒造業も営み富を蓄えた。よって明治維新後も吉木村では一番の大金持ちであり、祖先の由緒からも村の最有力者であった。その三輪家の当主である佐一郎は、甘蔵の海妻家が藩の下級武士であったことを見下し、ひいては甘蔵をも見下し、ことあるごとに甘蔵に反発、対立したといわれる。



『小學習字本』海妻甘蔵
（松寿堂、明治17年　福岡県）

7．故郷に戻る

明治24年（１８９１）、甘蔵68歳の時、吉木村を出て生まれ故郷の福岡に戻る。福岡に戻ってから明治42年（１９０９）６月27日没する。享年86歳。亡骸は、福岡の成道寺に埋葬された。

8．おわりに

甘蔵が吉木村を引き払って８年後の明治32年（１８９９）、かつての門人等が発起人となって、甘蔵の碑（慶寿碑）が建てられた。場所は、吉木村の熊野神社の境内で、今でも境内の左側奥に「海妻先生の碑」と刻まれた見事で大きな碑が存在する。ちなみに、甘蔵の生涯の著者としては、文中に記した物以外では「筑前地誌略」、「光格天皇御遺事」、「仁孝天皇御遺事」がある。

9．余滴

甘蔵の碑文の書は、同じく福岡藩出身の早川勇の手による。早川は、遠賀郡虫生津村（現・遠賀町）の生まれで、幕末の動乱の中で高杉晋作・坂本龍馬・西郷隆盛と共に奔走した勤王の武士である。明治維新後は新政府に出仕して、最終的には元老院の大書記官を務めた。そんな早川が郷土の先輩のため一肌脱いだ仕事だったようである。今一つ、甘蔵が吉木に在住している間、何かと対立していた三輪佐一郎の碑（頌徳碑）が甘蔵の碑の左側に建てられている。これもまた運命のいたずらか、人の世の皮肉というべきであろうか。

辻　来夢・錦織智也
三浦明彦（遠賀町在住・郷土史家）

参考文献　三百藩家臣人名事典
新人物住来社
全国諸藩剣豪人名事典
新人物住来社
木綿間（創刊30号記念号）
岡垣歴史文化研究会

Ⅰ 明治初期の教育

岡垣にあった寺子屋と塾

幕藩体制が続いた18世紀中期（宝暦年間以降）ころから幕末にかけて、当時の民衆の日常生活や、生産活動の進展に伴い、読み、書きの必要と要求から、民衆の教育機関として寺子屋などが、全国的に急速な広がりを見せた。岡垣地域でも、このころかなりの寺子屋があったと確認されている。

明治23年に文部省が調査して、発行した『日本教育史資料』に、この時期の「私塾・寺子屋一覧」がある。

聞き取りによると明治初期、東黒山の田中孫平も寺子屋の師匠をしていたことがある。また、波津の真福寺にも寺子屋があった。これらの寺子屋では、いわゆる素読や手習い、それにそろばんを教えたもので、それが私塾ともなると、塾規を定め国学・漢学などを主にした講義で教授した。

私塾は、岡垣では吉木にあった「己百斎塾」が唯一のものである。これは福岡藩士だった海妻甘藏が吉木に定住し、明治二年以降開塾したもので、近郷の子弟が数多くその門をくぐった。

なお、糠塚では村人の求めで、安政6年（１８５９）林次敏を迎えて、１年余塾が開かれた。

学制頒布のころ

廃藩置県後の明治５年９月５日、明治新政府は学制を頒布した。このときだされた「学制序文」には「自分以後一般の人民かならず邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめんことを期す」とあるように、国民皆学と義務教育をうち出した画期的なもので、このときから我が国は近代学校教育制度をしくことになる。これと同時に「小学教則」や「中学教則」も公布された。学制では福岡県は第６大学区で遠賀郡は、宗像・鞍手とともに、第33番中学区であり、吉木・高倉は第１、内浦、波津は第２、山田・糠塚は第４小学区になっていた。

明治６年４月には福岡・小倉・三潴の三県は第５大学区に改められた。同年山田・黒山・糠塚・戸切・海老津の５か村で、山田小学が設立された。明治７年上畑・高倉・吉木・野間・三吉・松原の６か村を対象として吉木小学が発足した。教師３名、生徒１５０余で吉木小学が設立された。『吉木続旧記』には教師安部莵治彦・麻生廓忍・門司彌左衛門の３人、生徒数１５０余とし、『福岡県史資料』第壱輯は教師２、生徒数１６５人としている。同年３月大字内浦字高入に、通学区域を波津・原・内浦・手野の４村とする内浦小学が創立された。明治９年には遠賀郡は第４大学区となり、内浦小学は第２番区になっている。吉木校は旧福岡県では、大規模校の一つにあがっていた。

当時の小学は制度的にも草創期であり、教師費用等も民費で負担した。戸数割・人員割で、割り当てられており、明治８年高倉村の場合には戸数割18銭である。負担は教師給・教員宿料・大区学費・教員旅費・世話役旅費に及んでいる。明治10年の教員給よりすると、教師は各校２～３人と推定される。

中央で、公示された教則に従って旧福岡県は、明治７年に小学校則・教則が定めている。小倉県・三潴県も校則等が定められたが、それぞれで違っていた。しかし、管内統一の必要から明治10年４月「上・下小学教則改定」が示され同12月には再改正された。

その内容は課程を上・下２等に分け下等は満６歳から10歳、上等は10歳から満14歳までとし各４か年、上・下各８級に分け毎級６か月の習業で、試験によって昇級・卒業させた。習業は１日５時間となっていた。

（平原弘稀）

山田小学校

明治六年、山田・黒山・糠塚・海老津・戸切の五か村協同で、山田村氏森神社の客殿を修理して授業を開始した。当初、日新小学校と称していた。これが岡垣地域での最初の小学校である。明治十年十一月二十八日、山田小学校から分離して糠塚小学校が設立開校された。だが同十七年、町村分画が改正されたことで実情に合わなくなり、明治二十年に山田・糠塚両校の合併が出願された。同校は明治十九年より簡易小学校となっていたが、この段階では合併は保留となり、同二十二年の町村制実施で矢矧村の発足に伴い、糠塚小学校は廃止され糠塚・黒山はもとの山田小学校に復した。これにより、矢矧村立山田尋常小学校となって通学区域も発足時の五地域に戻った。

明治二十三年、山田字宮ノ尾に工事費一二七円七銭四厘で、建坪七〇坪の新校舎が十二月竣工した。

明治二十六年、校区内である戸切区の檞原・河内地区から、通学校変更の訴えが出された。この地域から山田校に通学するには、一里二十町余（六キロメートル余）の遠距離である上、その間の通学道路が狭く粘土質で通学困難であり、隣接の宗像郡吉武村吉留小学校に行きたいというものである。

これに対する矢矧村村会の議決は、次のとおりである。

本村大字戸切檞原及河内学齢児童ノモノ宗像郡吉武村エ寄留シ該村尋常校エ登校スルヲ以テ該校費トシテ通学生徒一名ニ付壱ケ年金壱円七拾銭ツ、補助セント欲ス右生徒ノ数ニ拘ハラス五円乃至七円ノ投渡ニ談判アラン事ニ決ス

以後、昭和三十九年に至るまで、この地域の子どもたちは現在の宗像市吉武小学校に通うことになる。

明治四十年、山田校は従来は三学級編成であったが、一学級増加のため仮教室を設け教室不足を補うことにした。しかし、同年十月岡県・矢矧両村合併となりいったん廃校し、明治四十一年四月岡垣村立となった。小学校令改正に伴う義務教育延長のため、第五学年児童を吉木小学校に編入して、岡垣高等小学校に収容した。翌四十二年には第五、六学年は、同校で引き続き授業を受けた。

明治四十三年には、第五学年を収容するため氏森宮の客殿を修理して、二学級の仮教室としたが第六学年はそのまま岡垣高等小学校で授業を続けた。同年十月、山田区字登り立に校舎の新築工事が着手されて、翌四十四年七月に新校舎が竣功し十月二十日開校式が行なわれた。また、高倉小学校もこの時廃止されたため、上畑が通学区に加えられ六通学区となった。また黒山のうち、字本村は通学の便利さから吉木尋常小学校の通学区に変更された。昭和三年には奉安殿が竣功して落成式を挙行した。翌四年校舎の移転工事と運動場の拡張工事が行なわれ、校地の総面積は一町一反一畝一一歩となった。同十二年二月には講堂を新築し、同十四年になると炭鉱からの児童が急増して一〇〇〇人を超すまでになり校舎の増築が必要となった。十六年国民学校令公布で山田国民学校と改称した。翌十七年五月南二階校舎の新築で狭あいだった教室難が解消された。昭和十八年四月戸切分教場が独立して、新たに戸切国民学校が誕生した。

吉木小学校

明治七年一月五日、当時廃寺となっていた矢口の勝業寺に手を入れて整備の上開校した。以後、年々生徒数が増加し収容困難となったので、時の戸長三輪十久壮の熱心なる尽力によって、同十二年十月「コの字型」の校舎が新築された。校舎が壮大で設備の完全なことは郡内第一であったといわれる。その業績が認められ県令より「遷喬」の扁額を受けた。

『吉木小百年史』巻頭の「遷喬の由来」によると、中国最古の詩経-詩歌の小雅伐木篇にある「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶、出於幽谷、遷喬木」からでた語で、平和な農村風景の中で鶯は美しい声で仲よくさえずり合い、谷間から喬い木に飛び移っていく姿にたとえ、友人同士が励まし合い声かけ合って、ともどもに仲よく善きに移り高きに進み向上昇進する趣旨の詩で、今も講堂に掲げられている。上・下等で始まり明治十四年三月高等科を併置、同十九年学制の改革で高等科を廃止、尋常小学校に指定された。

明治四十一年三月にいたり岡県・矢矧両村合併のためいったん廃止、四月一日岡垣村立吉木尋常小学校と改める。この後明治四十二年に村会で尋常高等小学校の移転新築が決議され、吉木区に対し新しい移転地の敷地確保が依頼されている。吉木区は、早速同年二月の伍長協議員会で、予定地の敷地買収・家屋移転（四戸）を翌年までかかって取り組んでいる。

吉木区の明治四十四年二月の議事録によると、このとき学校敷地買収に当たって吉木出身の成功者（川原儀六・海妻猪勇彦・石井房次など九人）に寄附を仰いだことが記録されている。

同四十四年三月大字吉木字矢口に校舎を新築、高等科を併置して、吉木尋常高等小学校と改称した。通学区も全村に拡大され、本村教育の中核として発展する。

大正元年　裁縫室を新築、同五年理科室設置、同八年家事室を増築した。

昭和五年　講堂敷地、運動場拡張用地買収、昭和九年講堂を新築竣工する。

昭和十六年　吉木国民学校と改称、同十八年奉安殿を建設する。

内浦小学校

明治七年二月本校を内浦区字高入に創立、下等小学教科程度で開校した。同十九年小学校令発布により小学簡易科に指定されたが、通学区民の請願により尋常小学校に改定された。

明治二十二年、児童数の増加に伴い、字名切に新校舎を竣工し授業を再開したが、同二十四年、波津小学校簡易科廃止のため、本校に合併され波津も通学区となった。

明治三十六年十月、校地・校舎狭小のため内浦字校高入・原字田ノ草の地に新校舎が落成、移転した。

同四十年三月、小学校令改正によって尋常小学校修業年限は六か年となり、同年十月岡県・矢矧両村合併によって、岡垣村立内浦尋常小学校と改称され、第五学年を加設し、内浦村村社若宮神社の拝殿を借り一学級を収容した。

同四十三年第六学年を吉木尋常小学校の学籍に移す。同四十四年校舎狭小となったため、原区田ノ草に五五八坪校地を拡張して、校舎を増築し第六学年を加設六学級編成となった。

大正十二年　裁縫室（二五坪）を増築、昭和六年には講堂が新築された。

昭和十六年　国民学校令公布によって、内浦国民学校と改称、同十八年四月奉安殿を新設した。

（関　健成）

簡易小学校

高倉小学校は明治十三年四月吉木小学校の分教場として、高倉村字楽田に校舎三十六坪が通学区域高倉・野間・上畑で設置された。

同十七年十一月分教場を廃止して、高倉村字百合野に高倉小学として設立された（通学区は前と同じ）。

明治十九年の小学校令で高倉小学簡易科となり、修業年限三か年の単級で編成された。同二十三年十月小学校令の改正によって、小学簡易科を廃して高倉尋常小学校と改称した。明治二十六年二月前述の高倉分教場跡に、校地三六六坪、校舎三八坪、新築費六六八円を投じて校舎を新築した。

同三十一年三月補習科を設け、翌三十二年補習科、子守教室附設のため増築工事を行い、翌三十四年補習科を廃止して、修業年限四か年の二学級編成となった。

明治四十年岡県、矢矧両村合併に伴い岡垣村立高倉尋常小学校と改称したが、同十四年吉木尋常高等小学校の完成により廃校となった。高倉・野間は吉木校区に併合され、上畑は山田校の通学区に改められた。高倉尋常小学校は高倉神社の西、乳垂川の向かい側にあった。

明治十九年に波津小学簡易科が設置される以前の波津地区の通学校を明示した記録は見いだされていない。当初より、学制に基づいて、何らかの方法で就学の道が講じられていたことは当然であり、否定できない。明治九年の内浦小学の学区戸数は三一三戸である。吉木・三吉・黒山（一部）・上畑・高倉の各村は吉木小学の校区に属していた。明らかに内浦校区に波津地区を含んでいる。しかも戸数は最も多い。小学校の負担金である戸掛り費用も、他小学と全く同様に、三一三戸が平等に負担している。以上のことからも、当初より、波津地区は内浦小学の学区に属していたと断定することができる。

明治十九年の小学校令では、土地の状況によっては尋常小学校の代用として、修業年限３か年の小学簡易科が認められた。尋常小学校と異なる点は、授業料を徴収せず必要経費はすべて区町村費によって賄われたのが特色である。学科は読書・作文・習字・算術の四科目で、授業時間は毎日二時間以上三時間までと定められていた。

この措置は当時の社会情勢を考慮し、就学困難地域を対象として、就学率の向上を図ったものである。福岡県の場合もこの措置で新たに四五〇校の簡易科ができ、翌二十年には四八七校、同二十一年には五三〇校と増加している。

矢矧高等小学校の発足

遠賀郡に公立の中学校を設立する動きは、明治十四年九月三十日の第一回大区会に始まる。同十二年六月には戸長委員において「変則中学一ヶ年用度の概算」として六四八円を見込み、内九六円は生徒八〇人の授業料、残金五五二円は一戸当り六銭として郡内戸数九二〇〇戸に割り当てる決定を行っている。この決定によるものだろうか、よく十三年八月糠塚村では寄附金の徴収を行なっている。なお同村の場合、七月にも「中学校建築寄附金9」として、四〇人で三四円七〇銭の寄附を行っている。このような経過を経て同十三年七月二十日に県立芦屋中学が開校されている。

開校時の同校は学期年数四年、教師男六人、生徒男八一人であったが、生徒数は年々増加して明治十七年には一七四人になっている。しかし、県財政の悪化のために翌十八年三月県立芦屋中学校は廃止された。そのため遠賀郡全郡連合町村会では連合町村会費の中から捻出して、同年九月十一日修学年限三年の涵泳学校を設立した。この涵泳学校も翌十九年四月の小学校令・中学校令の公布によって廃校となり、その跡に芦屋高等小学校が設立された。

芦屋中学校の廃止に伴って私立学校の設立をみている。遠賀郡内でも明善校（上底井野）、益習舎（若松）、岡洞校（本城）等が設立された。吉木でも海妻甘蔵によって時習学校が同十八年に設立されている。

芦屋高等小学校は生徒二三人、校長兼訓導一人、訓導二人で発足したが、年を追って生徒数が増加した。同二十一年二階建て一棟が増築され、翌二十二年町村制が施行されて遠賀郡全町村組合立に変更され、翌二十三年寄宿舎も建てられた。生徒数は三一二人六学級と増え教員数も校長一人、訓導一〇人、裁縫教員一人の一二人となった。女子生徒も増え裁縫科と農業科が設けられた。

入学希望者も増えたが不便な点も多かったので、二十三年には石峯（若松）・黒崎に分校が設けられた。岡垣からの通学生が何人くらいあったか定かではないが、かなりの生徒がいたものと思われる。

明治二十五年には石峯・黒崎の分校は独立し、新たに長津（中間）・岡県（岡垣）に高等小学校が設立され、郡内一校から五校の高等小学校に増加した。岡県高等小学校はこの年の五月、吉木小学校の教室を借用して開校された。

明治三十一年四月矢矧村大字黒山字鋤崎に校舎を新築し、遠賀郡全町村組合立で矢矧高等小学校と改称し、修業年限四か年の高等小学校が設立された。同三十六年四月より農業科及び手工科を加設した。同四十年四月群学校組合は解散したため、岡県・矢矧両村組合となった。同年十月岡県・矢矧両村合併で岡垣村となり、岡垣村立岡垣高等小学校と改め同四十一年修業年限を二か年とした。

明治四十四年三月矢矧高等小学校は校舎を吉木小学校の地に移転し、校名も吉木尋常小学校と改称し岡垣村全地域をもって通学区とした。移転について、門司亮著『わが人生』から拾ってみると、次のとおりである。「黒山の鋤崎にある校舎から吉木の矢口の校舎まで全教員生徒が一致協力して教員教材の運搬をした。机は一人で一つ腰掛は一人で二つを途中休み休み二時間余りをかけて運んだ。掃除用具や図書、各種備品など生徒の手で運べるものはすべて運んだ。校舎はあるが運動場がなく、師弟一体となって運動場づくりに取り組んだ。当時運動場の予定地は水田が半分、残りは一メートルも高段の桑畑であった。そこを生徒は自宅から鍬、ツルハシ、スコップ、えぶしょうけ、ふご等持参で、午前中授業、午後は整地作業をした。初めのころは父兄の中にも『子供は土方を習いに学校に行かしているんではないぞ』と怒鳴りこむ人もあったが、教師生徒の毎日の汗の愛校作業の姿をみて、それまでの不平や苦情はいつの間にか消え、父兄も海岸から砂を牛舎や牛の背でどんどん運び二か月余りで立派な運動場がみごとに三者一体で完成した。」

（大庭海斉）

Ⅱ 大正期の教育

戸切小学校

大正十一年十月、海老津炭鉱経営者である吉田磯吉は同炭鉱従業員の子弟教育のため、学校設置を願い出ていたところ認可があった。翌年四月、私立戸切小学校として金丸勘吉（海老津炭鉱の共同経営者）の経営で戸切字百合野に開校した。

当時の「伊藤日記」によれば「大正十二年六月二日、土曜日晴天、戸切小学校に宮内校長を尋ねた。同行は四学年三学級である。児童数二〇〇〇人に近く教員三人の負担としては重荷である」とある。当時の校舎は平家木造瓦葺きでL字型だった。井土成徳氏（当時山田小教師）は大正九、十年ころを回顧し次のように述べている。「炭鉱が発達するにつれ、教室（山田校）が不足して二部授業もあった。当時海老津炭鉱は戸切の高台にあって、遠いので一年生は炭鉱のガタ馬車で通学していた」と、これらの事由で開校されたのではなかろうか。

学童は炭鉱関係者の子弟ばかりで、地元のものは檞原・河内を除き山田小学校へ通った。昭和二年四月、岡垣村へ移管され山田尋常小学校戸切分教場と改称し、尋常四年まで四学級で、五、六年生は山田校へ通った。このころは「炭杭の学校」といわれていた。昭和十年の村有財産台帖では、平家木造瓦葺き三棟一〇一坪と記録されている。昭和一六年四月、国民学校令により山田国民学校戸切分教場と改称された。このころ、春の遠足には上学年は芦屋へ教科書の購入を兼ねて行き、下学年は吉留の八所宮・武丸の孝子正助廟へ行った。運動会には炭鉱から人が来て、天幕張り・ライン引き等一切の準備作業をして、当日は炭鉱医と看護婦が派遣され盛大に行われた。同十八年四月、山田国民学校から分離独立して戸切国民学校と改称され、新たに二教室と宿直室が増築されて六学年までの六学級編成となり、職員も校長一人、訓導六人であった。十九年三月第一回の卒業生を送り出した。これらの校舎は昭和二十八年八月の豪雨による山崩れで校舎の一部が倒壊したため、解体されて二階建てに改築された。

（尾首貴大）

Ⅲ 戦時下の教育

戦時下の昭和六年九月十八日に起きた満州事変を導火線に、上海事変、満洲国の建国、国際連盟の脱退、五・一五事件と、軍部による国家主義、軍国主義の道が急速に進められた。

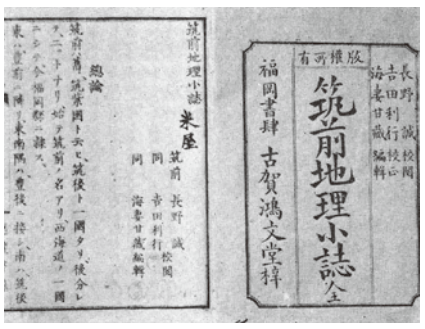
小学校教育では、同八年四月から初めて色刷りの小学国語読本（サクラ読本といった）が使用された。七月になると、文部省は「非常時と国民の覚悟」を各学校へ配布し、また全国連合小学校教員精神作興大会を開催して勅語の下賜があった。続いて昭和十年四月十日、国体明徴に関する声明が発表され、日本精神の昂揚のため毎月一日の早起会、神社参拝と皇居遥拝が始まった。翌十一年七月に福岡県下小学校教員服が制定され、男子服の上衣のふちには黒のモールがついて、丁度海軍の将校服に似たものとなり、また女子服は詰衿型・背広型等に変わった。教育界では昭和六年頃から、郷土学習、労作教育が盛んになり農村地域の学校では農業教育が重視された。子供の時から正しい真の農民魂を培わせ、堅実な強い心と身体を養うため吉木校では「鍬ぞろえ」があった。これは鎌倉武士の馬ぞろえにならって、学校の農具一切を運動場に並べ、その活用および使用後の手入れの状態を点検するものであった。また鍬どり練習では基本動作を体得させ、とくに左右どちらも使えるように練習を繰返し、耕し方、畔作り、整地、溝上げの作業等の熟練につとめた。農地は生きた教育実践の場であり、暇ある毎に農場に行かせて作物と土になじませると共にたゆまぬ熱意と努力で、作物造りを習得させた。遠賀郡内学校園の野菜品評会も、このころ行われた。昭和九年講堂が出来てからは校内品評会も度々開催されていた。また高倉に土地を借り受けて、開墾し果樹園を造り果実の栽培も併せて習得したが、この果樹園を名づけて「波壌園」と呼んだ。内浦・山田の両小学校でも学校菜園が設けられて、野菜作りに励んでいた。農村部の小学校では、農繁期の田植と稲刈りには各四日間にわたる休暇日が設けられて、子守り、子使走り、農作業にと子供ながらに役だっていた。昭和八年頃、乳垂寮が熊野宮境内に設けられた。これは吉田松陰の「松下村塾」にならい、担任教師と生徒が二泊三日ほど寝食を共にして、家庭的雰囲気の中で各種の教養の基礎を体験させ、言葉遣いや、礼儀作法が指導された。毎月の朝会では、ラッパによる国旗掲揚、月一回の学級別継走、校旗を先頭に全生徒の分列行進も行われた。出席奨励もあって、毎月出席率の良い学級には賞状が授与されてその向上がはかられている。運動会も、明治期の吉木ケ浜運動会が復活し、軍歌を声高々に合唱して往復した。（内藤隆介）

こうした教育実習が認められ、吉木校は昭和十三年二月十一日福岡県知事から表彰を受けた。昭和十四年五月、武道が正科となって、小学校五・六年、高等科の男子に柔剣道、高等科女子には薙刀が教科に入った。木剣体操から木銃による軍事教練まで行われるようになった。昭和十二年戦時経済体制へ移行、国家総動員法公布、青少年学徒に賜わりたる勅語下賜と戦時体制は進展し、同十四年三国軍事同盟の成立と同時に第二次世界大戦がはじまった。文教行政の上にも戦時下教育という考えが強く示されるようになった。「臣民の道」も刊行され学校にも配布された。昭和十六年四月一日国民学校令が施行され、明治の初めより地方の実情にそって種々改正が加えられて、名実共に人々に親しまれてきた小学校という名称が廃止され「国民学校」改められた。新体制下の厳しい戦時教育が始まった。国民学校令第一条に「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的トス」と四十字の教育指針が要約されている。国民学校は初等科（六年）高等科（二年）に分かれ、教科を国民科（修身、国語、国史、地理を含む）理数科（算術、理科を含む・高等科）の五教科に分けて設定され、総ての教科は「国民錬成の一途に帰せしめ」られた。この改革で教育の全般にわたって、「皇国のみちを修練」させることが目ざされたのである。食糧・飼料等の増産運動が実施され、「教育ニ関スル戦時非常措置方策」が決定され、国民学校の児童はさらに、戦力増強にかりたてられていった。昭和十六年十二月八日ついに太平洋戦争の勃発となり、戦争はいよいよ熾烈を極めていった。勤労作業と時間短縮について県からの通達により、「高等科各学年とも授業は午前中に終えるを本体とす。十八年度については授業を行わない日は十五日以内を本位とす。午前中は授業に向け、午後の時間は、専ら戦力の増強に挺身させる」とあって、岡垣の高等科児童も農繁期には、午前中授業午後は農家に行って勤労奉仕に励んだ。昭和十八年からは戦局は不利となり連合艦隊の敗退、戦線の後退から玉砕へと変わった。同十九年六月サイパン島を制覇した米軍は、日本本土に対して本格的な爆撃を開始した。六月十六日北九州工業地帯の爆撃、八月二十日八幡の空襲、さらに大牟田、久留米、福岡の爆撃と続き、毎日が警戒警報、空襲警報の連続で、登下校も意の如くならず、満足な授業はできなくなって、学校も全くのまひ状態に陥った。昭和二十年八月六日の広島、九日の長崎の原子爆弾の投下によって、第二次世界大戦は八月十五日正午の「終戦の詔」で終戦を迎えることになった。

（當銘真人）

昭和28年までの戸切小学校（戸切字百合野）

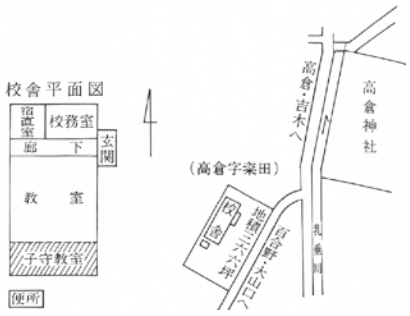
プレイバック写真帳 岡垣 学校教育 グラフィティ Graffiti〈明治～昭和〉



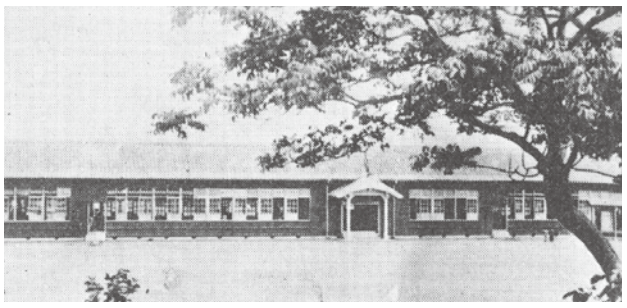
明治初期の教科書〈能美安男氏所蔵〉

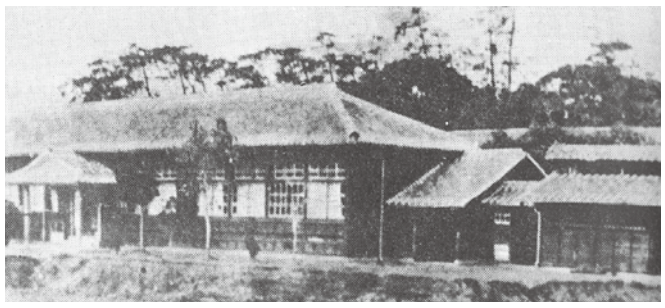
大正初期の山田尋常小学校と卒業生

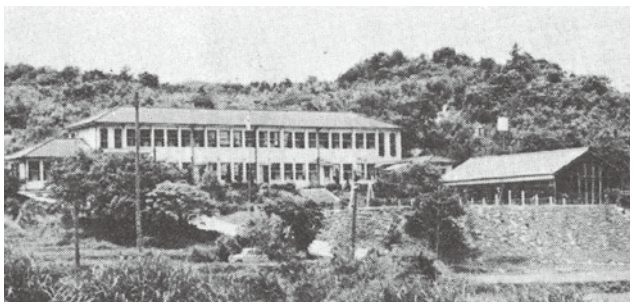
明治20年ころの吉木尋常小学校（吉木区矢口）

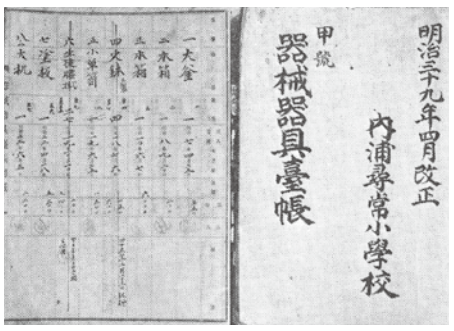


明治26年当時の高倉尋常小学校
〈『吉木小学校百年誌』〉

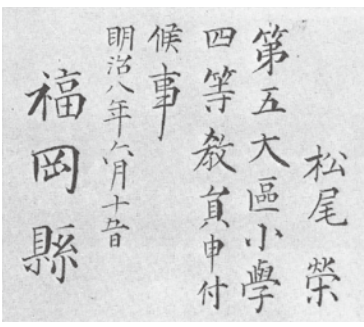

明治44年の吉木尋常高等小学校


明治37年ころの内浦尋常小学校

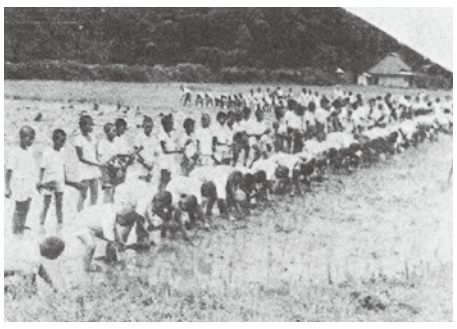

昭和43年までの戸切小学校（戸切字百合野）



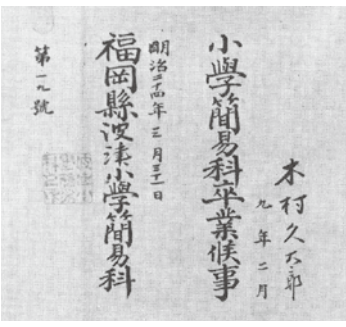
内浦尋常小学校備品台帳



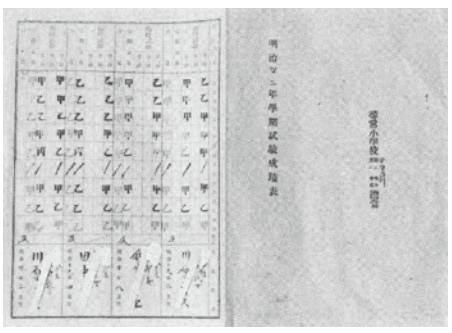
教員免許状〈松尾文書〉

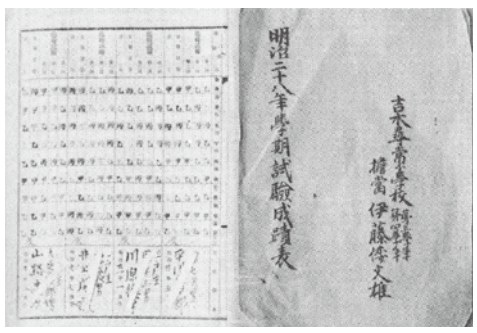

吉木校高等科男子生徒の田植風景（昭和16年）

明治40年ごろの6年生理科ノート（刀根博愛氏所蔵）



波津小学簡易科卒業証書
（木村千代雄氏提供）


明治32年の成績表（小早川厳氏提供）


明治28年の学期試験成績表

上等小学

科目	定点
読物	15点
問答	14〃
算術	20〃
図画	10〃
講義	25〃
作文	10〃
記簿	10〃
習字	20

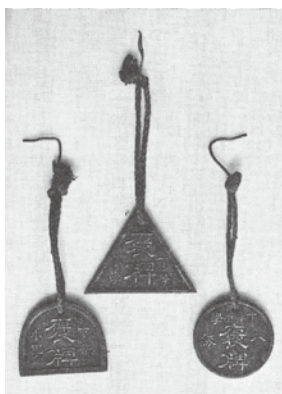
合点 124点最上等
〃 100点以上上等
〃 100点以下中等
〃 50点以下下等
下等及び１科零点の者は落第とする

下等小学

科目	定点
読物	9点
問答	10〃
算術	16〃
講義	15〃
作文	10〃
習字	15〃

合点 75点最上等
〃 70点以上上等
〃 70点以下中等
〃 25点以下下等
下等及び１科零点の者は落第とする

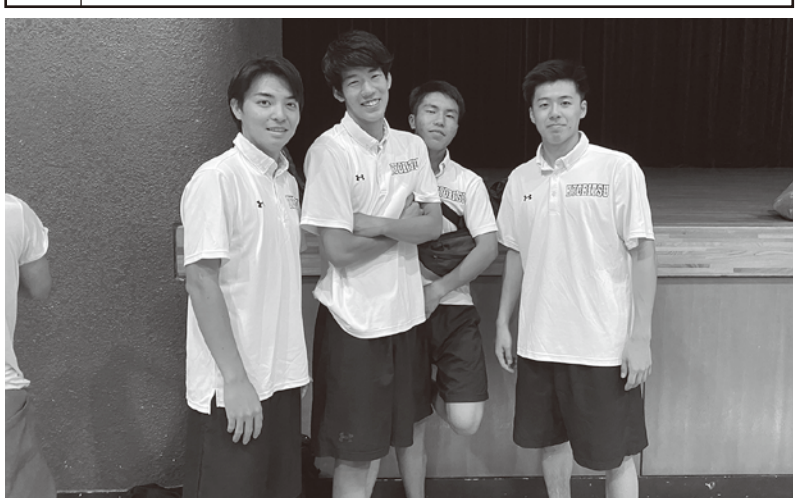
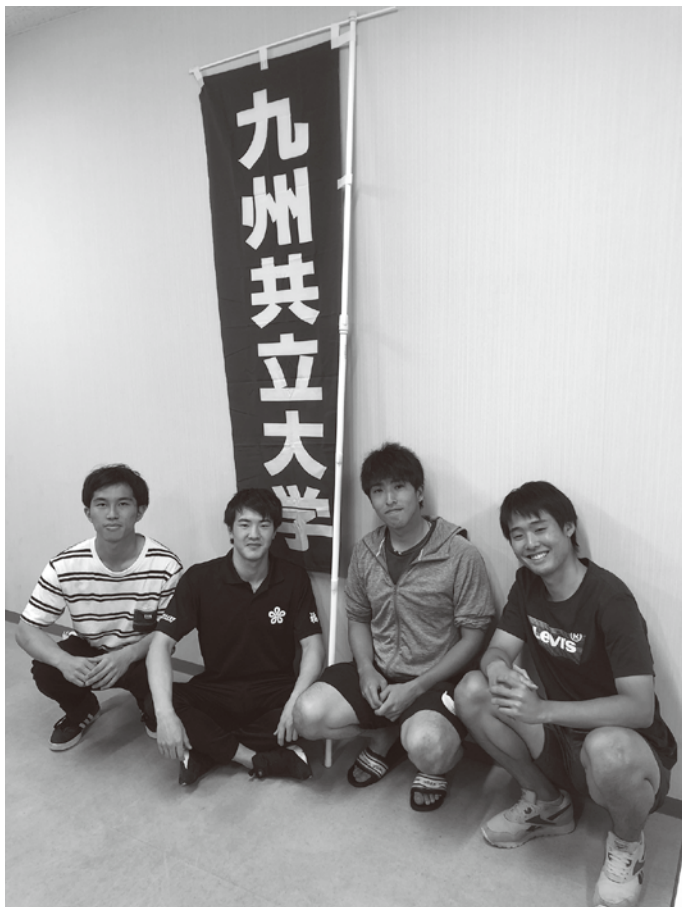
『福岡県教育百年史』
上等下等小学卒業大試験採点表


優秀な生徒に授与された褒牌
（井土成徳氏所蔵）

編集後記

地域活性化新聞「岡垣歴史新聞」も最終号（第５号）となりました。これまでのご愛読につきまして、厚くお礼申し上げます。学生ボランティアが地域貢献活動として実施してきたプロジェクトです。参加した延べ50名以上の学生は、地域社会について多くのことを学ぶとともに町民の方からの激励や賞賛に自己肯定感を高めることができました。あらためて感謝を申し上げます。この「岡垣歴史新聞（創刊号～第５号）」と昨年に完了したプロジェクト「岡垣学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を合わせてご活用いただき、岡垣町の「地域の魅力再発見！」に役立てていただければありがたいです。５年間のご支援、ご協力、ご愛読ありがとうございました。

（山田　明）

2020年度　地域連携事業【岡垣町／九州共立大学】『岡垣歴史新聞』プロジェクト・メンバー

指導教員			九州共立大学スポーツ学部　山田　明
学生	スポーツ学部スポーツ学科	3年生	大庭海斉　尾首貴大 関健成　平原弘稀
		2年生	内藤隆介　當銘真人 錦織智也　辻来夢
協力			郷土史家（遠賀町在住）　三浦明彦